

発信箱

官庁に丸投げして面白いものができるわけがない。やらせ質問、無駄な経費、動員……。「国民との直接対話」が聞いてあきれる。タウンミーティングは市民が主催し、そこに政治家や官僚が出向いて対話すればいい。簡単ではないが、絶対に盛り上がる。

千葉県では各種の福祉計画をつくるたびに、頻りにタウンミーティングを開いている。障害者差別をなくす条例を全国で初めて策定した際にも、県内32カ所で行った。すべて地元の障害者や市民が企画し、カンパで運営した。

県立高校の音楽ホールで開いたときには、女子高生たちが障害者への偏見や誤解をテーマに寸劇を披露した。養護学校や施設を訪ねて学び、自分たちでシナリオを作った

野沢 和弘



タウンミーティング

という。淑徳大学の大教室でやったタウンミーティングは精神障害者が自ら企画した。満員の会場には堂本暁子知事もいて、ずっと市民の発言をノートに書いていた。

県は参加人数分の資料を用意し、担当者が条例づくりの経過説明をするだけだ。どの会場でも質問や意見が相次ぎ、時間が足りなくなった。

福祉計画づくりを「官民協働」で始めたことがきっかけだった。現役世代の会社員が参加できるよう、会議は夜の県庁で行い、関係各課の職員たちが深夜まで傍聴する。障害者計画には目や耳の不自由な人、車いすの人などが参加した。知的障害者のために課長が日曜日に自宅を訪ね、4時間かけて予習したこともある。そんな職員の苦勞を見て、市民は信頼するようになった。

やっぱりカネと演出では「国民との直接対話」はできない。(社会部)